

競

輪

富士正晴 著

三一新書

略 歴

大正二年 徳島県に生れる

昭和十年 三高中退

昭和十九年春 応召 夏大陸へ送られ

昭和三十一年夏 復員

現住所 大阪府茨木市安威天王

所属団体 VIKING CLUB

競 輪

定価 140円

1956年10月25日 発 行

著 者 富 士 正 晴

発行者 田 畑 弘

印刷所 栗 津 製 版 印 刷 所

製本所 高 橋 製 本 所

発 行 所 株 式 会 社 三 一 書 房

京都市左京区北白川西平井町24
振替京都 6403 番
東京都千代田区神保町1の14
振替東京 84160 番

乱丁・落丁はおとりかえいたします

三 一 新 書 66

輪 競

富 士 正 晴 著

三 一 書 房

目次

競輪		七
どの日も同じ		九四
蟠龍山新春		一二
ひとこま		二八
肅正行軍		一七七
あとがき		二〇〇

競

輪

競輪

或日、わたしはNHKの街頭録音の放送を聞いた。街頭録音とか、放送討論会とかは家にひきこもりがちで、どうしても世間にうとくなり易いわたしのような人間にとって現実の風に一吹き吹かれる有難い番組と言つてよい。それは官僚の側に立つマス・コミュニケーションであるに相違ないだろうが、民間放送のコミュニケーションより、時々より自由であり、より大胆である場合がある。このことは日本の社会の成り立ちの一つの象徴であるように大変面白い。或いは官僚よりもより強力なブルジョワジイの圧力に対する一種の官僚の側からの衝動的抵抗と見ることが出来るのかも知れない。ブルジョワジイと官僚との複雑な相互関係についての分析はわたしのような単純無学な人間の手に余るからこれはその方の専門家に任せるとしよう。わたしはただ街頭録音や放送討論会を聞く度ごとに、今の日本に腹を立てたり、情けなくなつたりするのが有難いというだけのことであり、或日の宝くじ・競輪・競馬・パチンコなどにつ

いての街頭録音を聞いてひどくむかむかしたということと、その具体的理由をここで述べればそれで良いのである。但し、喋ったら気が済むというわけではない。喋って印刷して残し、その腹立たしき憤ろしさを忘れないように、忘れそうになつたとしても読みかえして再現出来るように、そしてわたしのその気持を人々のところにも点火させたいために書くわけである。人々に気持よい思いをさせようと言う気はない。又、小説であるという芸術であろうとする慾望もまあ無いだろう。

わたしは何に腹を立てたか。小ざかしい日本人の知恵に腹を立てた。彼らはわたしが教えたことのある新制中学生によく似たところがあるからだ。すなわち、四桁の計算も満足に出来ない癖に、代数面をして大いにかしこぶった口をきく。そのおかげでチョロリと自由党諸公の床屋政談の論理を自らよしとして、自分の首をしめにくるやつに進んで投票遊ばされるというわけである。

「宝くじ・競輪・競馬・パチンコのたぐいは有った方が良いと思いますか、無くした方が良いと思いますか、その女学生さん、どうですか」とアナウンサーは質問した。

「国民に夢を抱かすという意味で有っても良いと思います。パチンコは不良になりますから無い方が良いと思います」と小生意気そうな女高校生（だと思う）が言つた。夢とか涙とかい

う言葉を何とわれわれは好きなのだろう。それはそれで良い。果してそれは有って良いか。われわれ日本国民はそのような間拔けた夢を抱くのが良いのか。夢を抱けるのなら丁半ばくちも良いだろう。銀行ギャングだって夢を抱いてやるのだろう。

「みなさん、バクチで必ずもうけるのは胴元なんだぜ。いいか、国家がテラ銭をとって、国民にバクチをやらせてもうけてるんだ。損するのは国民の誰かだぜ。そして必ずもうけるのは国家なんだ。みなさん、これでも宝くじや、競輪・競馬が有って良いとおっしゃるか」と、テキ屋風の青年が喋りまくった。口調が変だから皆笑っていた。しかしわたしは笑いつつ笑えなかった。これは算術のように明らかな真実だからだ。しかるに、この後で女高校生は二人までも、夢の代数を出した。この連中なら、いくらリベートが何のかのと言いましても、やはり日本に船は必要なのですから、それに国会の権威をきずつけることは文化国家として諸外国に恥かしいですから、もうああいう問題を国会であばくのは止した方が良いと思いますと言うことであろう。わたしは吉田政府が今更教育に関する二法案を出した気が判らない。自由党式社会科は案外徹底して教えられているのではあるまいか。

宝くじ・競輪・競馬・パチンコは有って良いか。バクチで身を亡ぼすたあ、亡ぼすやつがしつかりしてないからだという議論もある。これは修身的代数学というやつで殊に日本で、いや

植民地的貧乏国でレンメンと栄える論理だ。中国ではもうとつくに亡んだだろうが、台湾ではますます盛んかも知れない。ところで、わたしはそのしっかりしてない人間を同じ家に住んで一シーズン眺め暮らして苦痛だった。たしかに崩れた、しっかりしてない、いい加減な小悪党であつたが、子供みたいに善良でもあつた。しっかりしてない人間が亡びるのは当然だと見てゐるのは、見とおしの利かぬカーヴで汽車や電車にはねとばされる子供を当然だと見てゐるような気が、わたしにはする。そしてまた自由党の政談演説は実にこのしっかりしてない奴に呼びかける呼びかけ方が巧みだという気がわたしにはする。

敗戦後、室を借りることはむずかしい。特に権利金なしの室を借りることはむずかしい。しかしながら室がなくてはわたし達は結婚生活をする事が出来ない。

わたし達は室さえあれば結婚出来るというところまで行つていた。つまり、わたしは彼女を愛し、彼女はわたしを愛してゐたということになるのだが、愛するという言葉の意味がわたしには判らなかつた。すると彼女も愛するという言葉の意味が判らなくなつてしまつたが、世間では普通こういうことを愛すると言つてゐるのだ。わたしと彼女は同じところに住み、同じ床に抱き合つて寝たかつた。この要求の点で二人は一致した。相手を出来るだけ気持よく（あえ

て幸福といわないのは、幸福という言葉の意味もよく判らないからである。したいという要求も一致した。氣持よくとは物質的にも精神的にも痛いことや苦しいことやつらいことを除くことである。これらの一致の上で、大いに協力して自分の身近のところから安樂をおしひろげて行こうということも一致した。何に向つてか。世界に向つてである。

わたし以外の子供は既に結婚して片づいていたからわたしの父の家は夫婦二人でまあまあささやかに安樂であつた。ところが彼女の父は既に死んでいて、律義者の子沢山のその子供をひきつれた彼女の母は窮迫していた。生命保険や貯金というものが一挙に意味を失つた時期を世間しらずの未亡人がしのいでゆくということは、洗い流すようにあらゆる家具や衣服が家の中から運び出されることの連続であつて、わたしは彼女の家へ行つてはじめて赤貧洗うが如しというタトエを具体的に理解した。そして貧乏が家の中を洗い果して、彼女に妾奉公をすすめたりする親切者が現われたりしたのだが、彼女の母親はそれを拒んだ。彼女の六千円ほどの給料妹の四千円ほどの給料、弟の二千円ほどの給料、合計一万二千円で、病身の母親、病身の妹、中学生の弟、小学生の妹の七人家族が昭和二十三、四年のあの苦しい時代をどう暮らしてゆけるだろう。これは余りに安樂でなさすぎる。

わたしの両親の暮しも安樂すぎる方ではないがまあわたしが金を入れる必要はなかった。と

言つてわたしを助けるほどの安樂さではなかった。しかし、彼女の家は彼女の給料なしでは絶対に生きてゆけっこない。そうなればわたしたちの一致した安樂拡大論からでも彼女は絶対に当分勤めを止めてはならないし、当分子を持つてはならない（中年者のわたしにとって何といまいましたことだ）、そしてそのためには第一に、わたしたちの室はわたしも彼女も勤めに通える場所になくしてはならないし、第二に産児制限の器具薬品を常備しなくてはならない。当時わたしの給料は七千円位だったから、その七千円でたてる暮しの中でこの第二の出費は何と重苦しいことだったろう。笑わずに読んでもらいたい。

わたしの父の部下の一人が自分の家の屋根裏を提供するといった。彼は工場のボイラー焚きだった。勤めぶりは上乘と言えず、又、とやかく噂のある男だったが、例えば工場の機械を持ち出して売ったとか、工場の社宅の子供たちをそそのかせて衣類を持ち出させ叩き買いしてひどくもうけたとか、無断欠勤しては野菜や米の闇屋をやっていると、そのようなことはわたしにとつてどうでもよかった。屋根裏、それも何でもなし。電車の駅に近い、そして電車の駅までの間に人家の切れるところが少し遠廻りしさえすれば無い、このことが一切だった。彼女の勤めている会社とその室の間には郊外電車と市電を合わせて一時間を要するが、それは彼女の辛抱であり、又、彼女の勤めている市でわたしたちの室をさがすことは不可能だった。彼女

の家へわたしが入り込むことは感心しなかった。彼女の母はわたしに、尤なことだが、娘を誘惑した不良中年という感じを捨て切れずわたしを腹の底では怨んでいた。新民法を楯にとつてわたしが結婚を強行したということは言える。わたしは親が許さないことを理由に心中する成年に達した若い人達が今尚絶えぬことを何か不甲斐ないことに感ずる。

わたしたちは結婚に先立ってその室を検分に行つた。それは瓦葺きのガッチリした二階建てで、表から見ると暗い感じがしたのはべにがらぬりの格子が表の方全部にはまっていたせいだろう。入ってゆくと秀さんと人々に呼ばれているその男は表から裏へつきぬけている農家風の叩きの玄関と茶の間との間の、格子戸が半びらきになっている向うで、つまり茶の間の前で布袋に米を注ぎこんでいる最中だった。わたしの顔を見ると薄黒いジャンパスがたの、ブカブカズボン下駄ばきの秀さんははつとして立ち上つたが、照れくさそうに笑つて、「おこしやす。やつぱり移つて来やはりまつか。この上でんね。あんたが今立ってはる叩きの上に室があります」と言つた。

茶の間の前の叩きには下駄箱とか野菜箱とかこわれた鍋とかが乱雑に壁によせかけてあり、そのそばから危い梯子が二階に向つてかかっていた。そして五、六足の下駄、男下駄や女下駄や女の子の下駄が茶の間の入り口のすぐ下にちらばっていた。わたしと彼女は茶の間の叩きに

入って行った。

「おこしやす。おくさんだっか」と秀さんは言った。彼女は黙って笑っていた。彼女をおくさんと言うのは少しばかり早すぎた。

「この梯子は危なそうだな」とわたしは梯子に手をかけてゆすぶりながら言った。

「そうでっかな。へへへ、危のまっしやるな」と秀さんは言ってやはり手をかけてゆすぶった。「危のまっしやるな」

わたしはスカートをはいた彼女が梯子段をはい上るのを下から見たり、人から見られたりするのにはかなわぬと思った。

「へえ、危のまっしやるな」と重ねて秀さんは言った。「ま、上って、住めるかどうか見ておくれやす。靴のままで良ろしま」

その屋根裏は梯子のかかるところに開いている端つこの三尺四方の切り穴を含めて十畳位のひろさがあり、頑丈な床にはほこりが随分つもり、何とも知れぬ機械や農具が少しころがつていた。いずれは天井を張り、畳を敷くつもりが建てる時にはあつたのだろう、北側の道路に面した側には曇ガラスのはまったガラス戸が四枚入ってその右手は荒壁だった。ガラス戸の左手のところから、直角に（勿論当り前のことだが）これも荒壁があり、その上は隣の室の天井の

上の空間が薄暗く開いていた。南側の壁の右手より縦二尺横五尺位の窓が板を叩きつけてふさがれていて、そのほかは東側も勿論荒壁である。

「どうだ。これで住めるか」とわたしは彼女にたずねた。

「寒いでしょうね。けど、仕方ないわ。住まなければ」

「うす暗いな。これ外したら少しはましか」

わたしは板をひつpegがして、南の窓から首をつき出して見た。裏には荒壁の便所らしいものと、その東側にぴったりひつついて納屋のようなものがすぐそばに見えた。

「はははあ。みてはりましたか。あこが便所です。一寸ええ眺めでしょう」

何時の間にか秀さんが上つて来ていた。

ええ眺めにも眺めと言えようなものは少しも無かった。右手に大きい銀杏が葉もなく殺風景につつ立っていて、その向うに寺の屋根が見えた。

「あのお寺は？」

「へ、あれは化け寺ですがな」と秀さんは寺の建物を嘲笑うように言った。

「便所のとなりは何です？」

「あ、あそこは昔、花むしろを織っていたところだ。いまはやってまへんけどな、下の広田